

自分の名前が「一心」  
なので、葦名かと思っ  
たら稲妻だった

クラウディ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なんか思い付いたやつ。

フロムゲーのなかでも和風な世界観である「隻狼」。

その隻狼の中でも一際ヤバイとんでもないちゃんである一心様……のパチモン転生者を原神の稲妻に放り込んでみたという作品です。

合わないなと思つたら即座に他の神作にレッツゴー！

もし面白いと思われましたら応援よろしくお願いします！

# 目次

伝説任務 不死断ちの章 剣聖

剣聖「葦名一心」 1

夜酒 9

稲妻魔神任務三幕及び一心様について

語るスレ 16

紅葉 37

民と神 47

葦名一心伝説任務について語るスレ

58



## 伝説任務 不死断ちの章 劍聖

## 劍聖「葦名一心」

「『葦名一心』……?」

「はい。今から数千年ほど前……『魔神戦争』が起きる以前の稲妻に生きていた劍豪です」

テイワットに存在する海上国『稻妻』。

その国に存在する『木漏茶屋』の一室にて、とある者たちが話し合っていた。

疑問符を浮かべながらある人物の名前を反芻した異郷の服を纏う少女——『螢』と、稲妻に住むものからすればまさしく天上人である和装の美女——『雷電影』。

そんな傍目から見れば接点の無さそうな二人が、これまたある人物について話し合っていた。

まず、彼女たちがこの場所でそのような話をする事になった経緯から話そう。

実は約一か月ほど前まで、この稲妻はとある問題を抱えていた。

「海祇島の土壌問題」に「妖や浪人などによる一般人への被害」、「権力のある名家の衰退」等々……割と深刻な問題が真っ先に思いつくであろうが、事態はそんなものではなかつ

た。

それは永遠を求める雷電將軍による『鎖国』——

——ではない。

七国の内、氷神が統治する『スネージナヤ』が保有する組織——『ファデュイ』による『神の心』奪取計画である。

この事件では様々な事情が絡まっていて、一から説明するのは相当な時間がかかってしまう。

なので今は割愛させてもらおう。

結末だけ話すなら、ファデュイを率いていた魔女を、とある目的で稲妻へと訪れていた蜚、国を治めるものとしてすでにファデュイと戦っていた影。

そして、稲妻に生きる多くの者たちの手で倒したことで終息した……ただそれだけである。

事件を解決した稲妻は、ある程度の平穏を取り戻し、外面的にはこの上なく平和であった。

——そう。『外面的には』だ。

その時のことを深く知る者たちは、とある奇妙なことを体験したのである。

「たつた一代で稲妻に名を遺すほど成長した名家『葦名家』……その初代当主である『葦名一心』。人呼んで『劍聖』。その劍術の冴えは、降りしきる雷を斬りました。さらに彼は雷を斬った劍術だけでなく、槍術、弓術……それら全てが神である私に並び立つほど。……いえ……もし、彼が今も生きていれば、凄まじい研鑽を続けているであろう彼に、私は斬られていたでしょう……それほどまでの力を持つていた、ただの人間です」

「うえ!? 雷を斬った上に影が負けるかもだつて!? なんだよそれ!? そいつ人間か!?」

「……ええ。彼はある時まで普通の人間でしたが、そのある時以降も種としては人間でした」

「……一斗とか、神子たちみたいな人でもないんだよね?」

「はい……」

影から告げられた言葉に驚愕する非常 *S.Y.*……小人——『パイモン』の信じられないという言葉を少し考えこみながらも影は否定する。

確かに、神の力の一端ともいえる雷を斬るような存在が同じ人間とは思えないだろう。

だが、稲妻にはその伝説がある。

「蛭。あなたは『雷返し』という技を知っていますか？」

「うん。「あやかしの雷は源の神鳴り 神業なくば弾き返せぬ すなわち、地に足つけぬ、雷返しなり」っておとぎ話で有名な技。万葉かずはが使った技だよ？ それと、あの時駆けつけてくれた見知らぬ侍も使ってた……。……え、もしかして……。!?」

影から問われた技——『雷返し』という技を記憶から掘り返した蛭はあることに思い至る。

『雷返し』という技は、落ちてくる雷を空中にいる間に刀で受けて受け流すというまさしく神の御業。

そんな技を蛭が見たのは、稲妻で暗躍していたファデュイとの決戦にて、稲妻の侍である『楓原万葉かえではるかすは』が切り札として使っていた時と、その戦場に乱入してきた「名無しの侍」が、息をするかの如く使っていた時だけだ。

自身の腕に火傷を負いながらも相手の小隊に壊滅的な被害を与えた万葉と比較して、見切ったと言わんばかりに雷に向かって跳び、そして万葉よりも精度の高い雷返しを見せたあの名無しの侍。どちらの技量が高いかは明確であった。

そして話題に上げられている人物は、武神である影ですら負ける可能性があると言っている。

そこまで言われれば、よほどの馬鹿でもない限り答えにたどり着く。



すなわち、その「名無しの侍」は……。

「……『葦名一心』……彼本人でしょう」

~~~~~

遙か水平線の向こうまで続く大海……降りしきる雷雨……風は突風となり、雨を横殴りに叩きつけてくる。

海を眺めながら酒でも一杯飲みたいものであったが、この悪天候じゃ飲めるものも飲めやしない。

後ろを振り返れば巨大な頭骨……おそらく蛇であろうそれは、いまだにおどろおどろしい空気を纏っておる。

正直に言えば、こんなところさつきとおさらばしたいのだが、あいにく生半可な強度の船では沈没するじやろう。

そもそも風が強いせいか、船の材料にできそうな樹木すらないがの。よくて低木しかないんじゃないが……。

そんな中で儂は……。

「おつと、こんなところで散歩かい爺さん？ のんきなもんだねえ〜」

「そうそう。こんな天気じゃ仕事もできやしない。ところで爺さんはいい着物を着てるとは、さぞいい身分だろうよ」

「と、いうわけなんだが……身ぐるみ置いていきな爺さん。痛い目見たくなけりやな」

明らかに盗人の集団に絡まれておつた。しかも刀を持つてるところからして、浪人崩れというところかの。

……はあく……。

「なんじゃおぬし等、今のご時世に「追い剥ぎ」かの？ 見たとこいい年じゃのに……。

あれか？ 若気の至りというやつでちよつと悪いことしてみよう、というやつかの？」

「はあ!? なに余裕ぶつてんだよジジイ！ お前みたいな老いぼれが俺らに勝てるかよ！」

「いや、普通に気になつただけじゃし。それと追い剥ぎとかは否定せんのかい。はあ……参つたのお……」

面倒くさい（直球）。

なんて言ったらこの盗人達の気が立つだろうから口には出さないが、正直に言えばほんとに面倒くさい。

いや、ねえ？

つい一ヶ月前くらいになんでか目が覚めたら、よく分からん奴らと稲妻の兵が入り乱れる戦場において、ちよつと血の気が沸いて暴れたけどやりすぎたから逃げて、暇だったから近くの浜で釣りしてたら高波にさらわれて、そんで気づけばこの嵐の真つ只中の島に流れ着いてただけなのに、散歩してたらこ奴らに絡まれたんじやが……。

いやほんと面倒くさい。

こいつらの言う通り、儂はただの老いぼれなんじやが……。

だが、まあ……。

「少しだけ、手解きをしてやろうかの」

「「？」」

さてと、腰に提げた鞘から刀を抜き放ち、正眼の構えをとる。

それと少しばかりの気迫を出し、盗人共を威圧してみるが……ようやっと状況を飲み込めたようじやの。

刀を持つ腕が震えておるが、退く気はない……というよりかは退こうとしても退けないことに気づいたんじゃないかな。

奴らが話すよりも先に刀を抜き放っておいたら、そうじゃな……

——三つ数える間に全員の首を刎ねておつたらう。

まあ、戦うとするなら血湧き肉躍る死闘を楽しみたい儂としてはそんなことをするのはもつたないからの。

それはそれでもつたない以前に、本来の儂でもそこまで墮ちとらんし、むしろそんな奴らを斬つてやる側じゃし。

まあ、あれじゃ。

こいつらは力量を見誤つたというわけじゃ。

そんな奴らに儂は鋭く告げた。

「我が名は『葦名一心』！ いざ尋常に参る！」

ま、パチモンじゃがの。

## 夜酒

「かつかつか！　こんな月夜に飲む酒はうまいのお！　安酒でもうまくなるうものだ！」

「……私はあまり飲まないのですその差はわかりません……そもそも飲み水にうまみを必要とするものなのでしょうか？」

「くかつ！　そういうところがお前の悪いところじゃ、影<sup>えい</sup>。飲み水にうまみという『楽しみ』があるからこそ、人は酒などを造るんじや。要は遊び心じや遊び心」

「遊び心……それはあなたの『葦名流』にも言えることですか？」

「ふうむ……まあ、言ってしまうばそうじやな。型にはまり過ぎるといづれ見切られる。それに、型にはまるのは儂からしてみれば窮屈じや。だからこそ、刀だろろうが槍だろろうが弓だろろうが、それがなくなつたら今度は拳や足で。こんな風に様々なことに手を出したんじや。覚えられるのは楽しいからのお……」

「……これが劍聖と呼ばれた男ですか……」

「劍聖！　かつはははは！　それは周りが言っただけじや！　儂自身が自称したわけじやない！」

しつかし……こんな時でも戦いのことかのかの？」

「今は戦争の時代です。気を抜いてはいられませんから……」

「かかつ！ 相変わらずの頭の固さじやのう！ あまり肩ひじ張り過ぎようものなら力の抜きどころも分からなくなるぞ？ それこそ……」

「今お前さんが握るその刀のようにな」

「……『修羅に堕ちる』……あれは嘘ではないのですね……」

「こんな時に戯言を吐く理由がどこにある。儂のことは儂自身がよう分かつとる。儂は世界にとつても毒となる悪鬼羅刹を斬りすぎたんじや。それこそ根絶やしにしたと言える程な……。そんな奴らの『怨嗟』は、無論、殺した儂に降り積もる。数えきれないほど切つたんじや。……もう、この『怨嗟』を抑えるのは無理じやろう」

「……私が斬らねばならないんですか……」

「お前さん以外に頼めそうにないからの。例えば、千代は力があるが、まあ、儂が両断して仕舞いじや。斎宮なら儂に積もっているだけの怨嗟をどうにかできそうじやが、まず

儂には勝てないし怨嗟は誰かに移ってしまう。笹百合はまあ速いがいずれ斬ってしまうじやろう。だからこそそのお前じや。儂もろとも怨嗟を消し去ってくれ」

「ッ！　なら皆の力で——！」

「……儂は長く生き過ぎた。この怨嗟のおかげで、他の者よりも狡ズルができた。お前さんらといるのも楽しかった。だからこそ、この怨嗟は儂もろとも消さねばならない。わかってくれ……」

「っ……！　楽しかったなら、私に殺させないでください……！　私だって楽しかったんですよ……！」

「くかかっ……お前みたいな別嬪さんに言われるのは悪くないのお……じやが——」

「もう、言葉は不要じや」

「……分かりました。後悔しないでくださいいね……」

「くくくっ、こんな過程と結末じや、後悔ばかりじやがな……」

「さあ参れ、影」

~~~~~

「っ！」

玉のような汗をかきながら、床から跳ね起きるようにして体を起こす影。

影のためにと作られた一室には誰もいないため、影の荒い呼吸だけが室内に響き渡る。

「夢、でしたか……」

万感の想いを込められた言葉は、誰に届くこともなく虚空に消える。

それもそのはず、今の時間は月が頂点にある夜中であつたからだ。

ふと部屋に差し込む月光を見れば、吸い込まれそうなほどの妖しさとともに、満月が爛々と輝いている。

「……あの時も、このような月でしたね……」



確かめるような、縫りたいといった声色で呟けば、心の奥底に押し込めていた感情の堰が壊れてしまいそうだ。

——稲妻の神である「雷電影」。

今は亡き友人曰く「頭が固い」と称されるほどの頑固者。

そんな彼女は永遠を求めるあまり、自分の理想を臣民に押し付けてしまいかねなかった。

——だが、その運命を変えたのはたった一人の人間。

そのちっぽけな一人によって、この稲妻は本来の流れから大きく変えられたのだ。

「……あなたは、大きすぎるものを残してくれました。あの櫻の木の下で集まれる皆との時間——千代、斎宮、笹百合……そして真との時間を守ってくれた。すべての悲しみ

……『怨嗟』をあなたが背負ってくれた。だから、『形』は残ったんです……」

影の脳裏によぎるのは、親友と家族の姿。

あの激動の時代ではいつ欠けてしまうか分かったものではなかった大切な者達。そんな時代を乗り越えられたのは……他でもない、一人の人間がいたからだ。

だが……。

「……あなたはもういない……いなくなつたはずなんです……諦めたかつたんです

……」

思い浮かぶのは一か月ほど前の光景。

フアデュイとの全面戦争の横合いから、刀を持った浪人が乱入してきたときのことだった。

元素の力を感じないのに、刀の一振りですらフアデュイを薙ぎ払っていく男。

そして振るわれる剣術は、お世辞にも綺麗とはいいがたく、まさしく喧嘩の如き乱雑さだった。

しかし、その太刀筋には見覚えがある。

それもそのはずだ。

自身の親友であり、そして最後は己が手で殺した者の剣術だったからだ。

「あなたは生きていますか……『一心』……」

その言葉は、夜闇に溶け、消えていった。

く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く  
く

「ぬう……洞窟はどこじゃ……さすがに寒いぞ……あと酒はどこじゃあ……」

そんな神の心を分からない分かるわけもない阿呆は、大雨の降りしきるヤシオリ島にて半ば遭難しかけていた。

# 稲妻魔神任務三幕及び一心様について語るスレ

1：名無しの旅人

ホイ立ってたぞお前ら

適当に話せ

2：名無しの旅人

立て乙ありがとさん

3：名無しの旅人

いやあーファデュイと淑女は強敵でしたねえー

(一心様になぎ倒されるファデュイたちを見ながら)

4：名無しの旅人

暗躍やばすぎてワロエナイ

(なお乱入者が入った最終決戦は含まない)

5：名無しの旅人

いやマジあの人強すぎるだろ

なんだよ雷を刀で受けて返すって

6：名無しの旅人

あの万葉ですら神の目使って体に電気が走らないようにしてようやくだったのに

……

7：名無しの旅人

あれで神の目がないってマ？

8：名無しの旅人

淑女も頑張ったよ？

部下たちに陽動任せて、自分は本丸突入して神の心奪いにかかるのはさ

でも、神をなめてたのは非常によくはない

9：名無しの旅人

璃月編みたいな戦い、その上をいく文字通りの総力戦で体震えたぜ  
哲平もカツコよかったぞ！

10：名無しの旅人

哲平もMVPだもんな

相手の動きがおかしいと思ったら、相手が裏取りしようとしてるのを見つけて、八重堂の小説で得た知識フル活用して小隊纏めあげたと思えば、別部隊をギリギリ食い止めてたもんな

11：名無しの旅人

でも邪眼持ちには苦戦するところがやっぱり元素扱える人間との差だな……

12：名無しの旅人

そこに現れる謎の侍こと一心様よ

13：名無しの旅人

哲平たちが押されて、もう少しで戦線が崩れそうなきに割り込んできたポン刀握った侍とかりアルで「誰!」って声が出たよ

14：名無しの旅人

そしたらいきなり操作できるようになって、訳もわからず戦い始めたら出るわ出るわ  
トンチキ剣術

15：名無しの旅人

あれで神の目持ってないってマ？（n回目）

16：名無しの旅人

キャラクター画面見たら、稲妻に行く前の喧嘩大会バージョン旅人よろしく元素なしと表記されて、攻撃力は驚異の「6000」オーバー

17：名無しの旅人

素であれとか頭おかしいでホンマ

18：名無しの旅人

通常攻撃天賦は刀で戦う「葦名流剣術」

居合から始まって、刀連携かと思っただらまさかの回し蹴りに繋げ、今度は刀に戻って二段切り

重撃は十文字に斬る（先遣隊を怯ませまくる）

19：名無しの旅人

いきなり蹴り始めてビックリしたゾ

十文字斬りの音が重すぎたのもヤバかった

20：名無しの旅人

天賦の倍率もなかなかにおかしかったなあ……

21：名無しの旅人

天賦レベル6で一発目から120%くらいだっけ？

22：名無しの旅人



そうそう

通常攻撃でもヤバかったのに、まさかの元素スキル枠と元素爆発枠があつたのもおかしいな

23：名無しの旅人

まあ、元素を使ったスキルっていうよりかはただの技だったけどな

24：名無しの旅人

ただの技（飛ぶ斬撃）

25：名無しの旅人

ただの技（遅れて飛んでくる複数の斬撃）

26：名無しの旅人

ただの技……？

27：名無しの旅人

あれがただの技とか稲妻の人間はどうなってるんだ！

28：名無しの旅人

稲妻人への熱い風評被害が飛んでくるウ！

29：名無しの旅人

あれは一心様がヤバすぎるだけだって……

あれで普通の人間ってマ？（n回目）

30：名無しの旅人

ちな元素スキルの名前は「秘伝・竜閃」

竜を斬るために鍛えてたら斬撃が飛ぶようになったってよ

31：名無しの旅人

頭おかC

32：名無しの旅人

単押しだと高威力の斬撃だけで、長押しだと今度は高威力の「飛ぶ斬撃」を使う

この斬撃は、元素増幅状態のフアデュイを攻撃しても拡散反応が起ころなかったことから風元素ではないことがわかった

要するに一心様はただの物理でこれを起こしているというわけだ！

33：名無しの旅人

ええ……

34：名無しの旅人

飛ぶ斬撃とか大海賊時代の方向音痴みたいなことしてる……

35：名無しの旅人

そして極めつけは……

36：名無しの旅人

うん……

37：名無しの旅人

あれなあ……

38：名無しの旅人

劍聖（十文字槍担ぐ）

39：名無しの旅人

ファデュイ「地面から十文字槍錬成するのヤメチクリ〜」

40：名無しの旅人

相手が吹き飛んでいくの笑っちゃまうんすよね（乾いた笑い）

41：名無しの旅人

相手が元素増幅していきようがなんだろうが構わず吹き飛ばす神の目なしの（推定）人

問

42：名無しの旅人

爆発天賦は「秘伝・一心」

まず発動時に前方に向かって1段目に倍率の高い物理ダメージの斬撃「秘伝・一心」を放ち、その後、遅れて高倍率の範囲物理ダメージを9連続で発生させる

爆発発動後、十文字槍を持ち出し、一定時間「剣聖」状態で戦う

この際の攻撃は元素爆発とみなされる

43：名無しの旅人

なんで斬撃が遅れて飛んでくるんですかねえ……

44：名無しの旅人

これで適当に暴れるだけでファデュイが溶ける溶ける

45：名無しの旅人

このときの攻撃の倍率高すぎてバフ無しなのにダメージ5桁普通に出るねんな

46：名無しの旅人

爆発80族だけイベント戦なのか溜まりやすく最高に楽しかったなあ……

47：名無しの旅人

最適聖遺物は絶縁か？

蒼白も一応合いそうだけど

48：名無しの旅人

爆発で暴れまわるなら絶縁

スキルとか通常でも暴れるなら蒼白がいい

49：名無しの旅人

あー！早よ実装してくれ運営さん！

50：名無しの旅人

まあ、これ見て落ち着け

(URL)

51：名無しの旅人

又!?

52：名無しの旅人

公式が出した神ムービーやんけ！

53：名無しの旅人

ああ……一心様と影ちゃんの関係性が表れていいですねえ……

54：名無しの旅人

怨嗟ってなんやろな？

文字からして呪いみたいだけど……

55：名無しの旅人

遊び心を大切にするひょうきんな一心様と、いつでも堅苦しい影ちゃんの対比でご飯何杯もいける

56：名無しの旅人

一幕、二幕で出会った笹百合さんとか、千代ちゃん、斎宮さんなんか知ってる風だったけど、今回の伝説任務で語られるのかな？

57：名無しの旅人

一心様の伝説任務だからもう一回遊べるの期待してるぞ運営！

58：名無しの旅人

初見です

最近始めて稲妻の三幕終わらせたら新しい伝説任務行けるようになって調べてました

59：名無しの旅人

お、新人さんか？

60：名無しの旅人

新人旅人だ囲め囲め！



61：名無しの旅人

とりあえず座つていいぞく

62：名無しの旅人

ありがとうございます

早速なんですけど、今回の伝説任務である「不死断ちの章」の一心さんなんですけど、どんな感じなんですか？

63：名無しの旅人

ヤバイ

64：名無しの旅人

ヤバイとしか言いようがない

65：名無しの旅人

えっと、どういうことですか？

66：名無しの旅人

まずこのスレを遡ってもらえれば分かるけど、一心様は神の目を持ってない  
これ分かる？

67：名無しの旅人

一応は……

68：名無しの旅人

んで、攻撃力に関して言えば、イベント補正かなんかで上げられてると思うんよ

69：名無しの旅人

はい……？

70：名無しの旅人

ただ天賦がイカれてるってのはよくわかる

天賦6とはいえ、初段が素で倍率100%超え

そして攻撃力6000オーバーということは、相手の防御力にもよるが最低6000

程度のダメージは出るということ

そして攻撃つてのは連続して出すほど倍率も上がる  
スキルなんか倍率がイカれてるのは普通だ

71：名無しの旅人

ちな一心様のスキル倍率は天賦6で900オーバーな

72：名無しの旅人

なにそれ初耳

73：名無しの旅人

見てないやつが悪い

74：名無しの旅人

あれは見なくて暴れまわるのが普通だろ！

75：名無しの旅人

あー、話し戻すとかなーりイカれた天賦倍率の攻撃がついてくるわけ  
それも結構な倍率でな

76：名無しの旅人

えつと、天賦とか未だわからなくて……

77：名無しの旅人

それは仕方ない

俺だつて気づくのに三ヶ月かかった

78：名無しの旅人

しかも一心様つて高身長だよな？

鍾離先生よりでかくね？

79：名無しの旅人

あー、確かに

思い返してみればかなりデカイな

80：名無しの旅人

え？

身長高いと何かあるんですか？

81：名無しの旅人

原神つて身長高いキャラは、身長低いキャラと比べると移動速度上なのよ

82：名無しの旅人

そして一心様は攻撃の発生がかなり早い

天賦の倍率も高いし移動速度も高いから、ヒットアンドアウェイ戦法が可能だと思う

83：名無しの旅人

初めて知りました

84：名無しの旅人

でも一番ヤバイのは爆発なんだよなあ……

85：名無しの旅人

爆発後のスーパードアーマー、高倍率広範囲物理攻撃、そうでなくても爆発の初段がヤバイ火力出す

その上、強化状態中の攻撃は爆発判定になるから絶縁が機能する

86：名無しの旅人

爆発も80族だしな

さすがにないけどあのイベントのまんまの攻撃力で来たら、元チャ盛って率ダメ伸ばすだけで良さそう

87：名無しの旅人

理想は絶縁聖遺物で、時計元チャ、杯物理ダメバフ、冠会心系ってところだな

88：名無しの旅人

んー、しかし、蒼白の物理ダメバフも捨てがたい

89：名無しの旅人

そもそも突破ステがなんかわからんだろ

90：名無しの旅人

熟知は絶対ないから、元チャか物理ダメバフ、もしくは率ダメ攻撃力か？

91：名無しの旅人

うーん……一心様が元チャって顔してるか？

92：名無しの旅人

いや全然

93：名無しの旅人

なら物理ダメバフか攻撃力じゃね？

もし物理ダメバフだったら、蒼白は過剰になりそうだけど

攻撃力だったら倍率高すぎてヤバイことになるけど

それなら率かダメだったら嬉しいな

94：名無しの旅人

まあ、実装されるかわからんけど、あの運営ならやってくれる！

95：名無しの旅人

白朮「おやおや……」

96：名無しの旅人

でも、もし実装されるならレザーエウルアに続く物理キャラ三人目で、初の無元素物理片手剣になりそうだなww

97：名無しの旅人

無元素つてところがおかしいゾ

98：名無しの旅人

いやあ、楽しみですねえ！



## 紅葉

「劍聖の逸話を知りたいのでござるか？」

「おう！ 影から一心伝の万葉なら、劍聖の人としての逸話を知ってるかもって聞いたんだ！」

「ふむ、確かに拙者は一心伝を継ぐ楓原の末裔。劍聖のことは幼少より教えられていたでござる」

「万葉のひいおじいちゃん、一心伝を受け継ぐ一人だったからなんだよね？」

「そうでござる旅人殿」

影と別れた蛭とパイモンは、彼女の薦めでとある人物のもとへ訪れていた。

蛭たちを待つていたのは結われた白髪に、一筋の紅葉のような髪を持つ美青年。

名は「かえてはらかずは楓原万葉」。

今となつては没落してしまった名家——「楓原家」、その末裔である。

そんな彼に会うことを、なぜ影は薦めたのか……それは彼の家系に関わる。

それは「雷電五箇伝」というものだ。

——「雷電五箇伝」

それは稲妻の神——「雷電將軍」がもたらした鍛造技術を継承する五つの流派。それが「天目」、「百目」、「千手」、「経津」、そして……「一心」。

この五つの流派のうち、万葉の曾祖父は一心伝を受け継いでいたのである。

「天目影打」……「波乱月白経津」……そして、雷電影が持つ「夢想の一心」。

これら現代にも残る名刀たちを生み出したのがこの流派たちだ。

そのうちの「一心伝」を受け継ぐ家が、万葉の生家「楓原家」である。

だからこそ、影は万葉に聞くことを薦めたのだ。

「さて、なにから聞きたいでござる?」

「うーん……まずは、葦名一心という人物について、かな?」

「葦名一心について……単純でありながら難しい質問でござるな。拙者が知っているのは又聞き之又聞き……さらにその又聞き程度の話であるが故、あまり信用にはならないが、それでもいいであるか?」

「うん、お願い」

「分かったでござる。まず、一心という人物がどのようなにして世に知られるようになったのかというところから始めるとしよう」

そうして万葉は一心という男について話し始めた。

「まず一心という男の生家……「葦名家」はどういったものなのかということを知って

るでござるか？」

「おう！ 影から聞いたぞ！ 『たった一代で稲妻に名を遺すほど成長した名家『葦名家』。その初代当主が葦名一心』って。一代で名を遺すって、どれだけ稼いだんだろうなあ……でへへへへ……」

「パイモン……」

「アツハハハ……稼いだか稼いでないかで言えば稼いだ方でござろう。なにせ、全くの無名の家が雷電五箇伝に並ぶどころか、將軍の懐刀となるまで成長したのだから」

「おおー！ じゃ、じゃあさー！ もしその一心に出会えたら、財宝をたんまり……」

パイモンが財宝に囲まれる妄想にふける横で、呆れたような表情をする蛍と、苦笑いを浮かべる万葉。

そんなパイモンに万葉は告げる。

「それはないでござるよパイモン殿。なにせ一心様は財宝をため込まない主義だそうで、困っている民には惜しみなく散財していたようだ。そのせいで葦名家の財政はいつであろうと火の車。むしろ他の家に頭を下げるのが常だったそうな」

「えー!? も、もつたないなあ……オイラだったらおいしいものをお腹いっぱい食べて、モラのベッドに寝転ぶくらいはしたかったけどなあ……」

「パイモン……流石にそれはないよ……」

少しうれしそうに語る万葉の言葉に、がっくりと残念がるパイモン。

そして冷たい目でパイモンを見る蛍。

このメンバーで稲妻に来てからはいつもの光景であった。

「それはさておき、一心様の家についてでござる。一心様の生まれた葦名家。拙者が生まれた時と同じく、もはや没落寸前の家であつたそうなの？」

「え!?!」

「没落寸前?!? なんぞだ?!? そいつが生まれるほどだつたんだろ?!?」

「驚くのも無理はない。なにせ、葦名家のある「葦名」という土地は、太古より「災い」に見舞われていたからでござる」

「災い……」

思わず息をのむ蛍とパイモン。

そんな二人の様子を察しながらも、万葉は話を続ける。

「葦名に根付く『怨嗟』によつて凶暴化した獣。『怨嗟』によつて正気を失つた人々。『怨嗟』によつて流行る病……『怨嗟』と呼ばれる、呪いとはまた違う現象によつて、葦名という地は地獄と化していた」

『怨嗟』……?」

「……今となつてはその正体を誰も知らない、負の連鎖というべき災い。それが『怨嗟』。」

これを見出したのは一心様に他ならない。『怨嗟』は生物に降り積もり、その者を狂わせる。妖であろうと、獣であろうと。そして……「人」であろうと」

「狂うとどうなるの……」

「狂うとどうなるか……それは拙者にも分からない……いや、「知ることができない」のでござる」

「ん？ 分からないじゃなくて、知ることができないのか？」

深みを持たせた言葉にパイモンが聞き返す。

「そうでござる。拙者自身、一度は葦名の土地に訪れたことがあるが、その時の自然はこう言ってきたのでござる」

『『知ろうとするな。怨嗟に魅入られたくはあるまい』と』

「……!!」

「それも突き放されてしまえば、拙者は聞くことができぬ。その時はただの観光で終わったのでござる」

自然に愛されているといっても過言ではない万葉が突き放されるほどの災い……「怨嗟」。

そのことにどれだけの過去があつたのか……そう思う蛍とパイモンの様子を見て、万葉は話を変える。

「さて、『怨嗟』についてはここまでにしておこう。葦名家の事情についてであつたな。本来、没落寸前の家を立て直すのは不可能に近い。そも資金がなければ人員を集めること自体が不可能に近い。しかし、それこそ、波打ち際に作られた砂の城をまた積み上げるがごときこと。もしそれをなせるとするなら……それを立て直すことだけに力を注いだ狂人くらいであろう」

「でも、成長したということとは……」

「そう。廃れていた葦名家を立て直すことに成功したということでごさる。他ならぬ、一心様の手によって……」

「ほえー……」

「そんなすごい人だつたんだ……」

万葉の話聞いた二人は1か月ほど前のことを思い出す。

ファデュイたちとの合戦で、乱入してきた男のことを。

『さあ!! 滾つてきたわあ!! ゆくぞお!!』

地面から十文字槍を引っこ抜き、それを片手に担ぎながらも人造神の目——「邪眼」を持つファデュイの軍勢を蹴散らす一人の侍。

綾華たちのような剣術……とはいいいがたく、万葉のような我流に近い、だが、剣術というよりかは喧嘩ともいえる戦い方をしていたあの男が曲がりなりにも家を再建させたという事実をのみ込めないようだ。

「あれはむしろ狂戦士なのでは……？」 そう思ったが口には出さなかった。

なんだかんだ空気が読める二人である

「そんな一心様であったが、なにも無から有を生みだしたわけではない。資金も雀の涙。士気は火種よりも弱かった。そんな状況でどうしたか？ 二人は分かるでござるか？」

「うーん……どうやったんだ？ 旅人は分かるか？」

「私も分からない……どうやったの万葉？」

「ふふつ、まあ思いつかないであろう。なにせ——」

「——雷を切るほど強くなったのでござる」

~~~~~

「へっくしよい!! うう……誰かが噂でもしてるのか、それとも普通に体が冷えてきたのか……流石に「眠いよパトラツシユ……」にはなりたくないの……」

そんなことがあるなどつゆ知らず、劍聖はまだ雨の降りしきるヤシオリ島の洞窟で必死に薪を集めていた。

そんな薪の数も小山程度には集まっており、火をつければ燃えそうであった。

湿気てなければの話だが……

「ふうむ……火をつけるにはどうするかのお……刀を走らせた火花でつけるにはちと大きすぎる……」

ああでもないこうでもないと言をひねる劍聖。

その時、不思議なことが起こった!

「あ、いいこと思いついた」

頭に電球がとまり、ポンツと手のひらと拳で音を立てるというある種古典的な動作をした劍聖は刀を持って外に出た。

外は岩をも削りそうな豪雨であり、ところどころ雷が落ちている。



そんな外に出て何をするのかと思えば、この劍聖――

「ほいつ」

――高々と跳躍したのである。

流石に垂直に飛んだわけではないが、壁を蹴るなどして空高く飛ぶ。

そして頭上に刀を構えれば、刀に青白い雷元素がにわか集まり始める。このままでは雷に打たれて墜落するだろう。

だが、この「劍聖」は違った。

「あやかしの雷は源の神鳴り」

落ちてきた雷を刀で受け、即座に振る。

「神業なくば弾き返せぬ」

外側に行こうとする力によって剣先に集まった雷を保ったまま、洞窟の入り口に落ちていく。

「すなわち——」

入口に入った瞬間——

雷鳴がとどろいた。

「——地に足つけぬ、雷返しなり、とな」

雨音にかき消されるほど静かに着地した剣聖の視線の先には……

轟々と燃え盛る薪の山があった。

## 民と神

「蛭にパイモン！ 相変わらず元気そうやなあ！」

「お前も元気そうだな宵宮！」

「こんにちは宵宮」

万葉の元を離れた二人は息抜きに「鳴神島」の城下町に訪れていた。

一か月前の合戦の影響もあり、街のいたるところでは大工が家屋の修繕にあたっていた。

そんな少し騒がしい稲妻の日常を横目に、たどり着いたのは「長野原花火屋」。

出迎えてくれたのはそんな花火屋の若き店主——「宵宮」であった。

相変わらず煤で汚れた顔をしているが、その美貌に陰りはない。

そんな宵宮の元へ訪れた二人の目的は、件の侍についてである。

「なあ、宵宮って剣聖って知ってるか？」

「ん？ 剣聖……ああ！ 一心様のことやね！ それなら知ってるで！」

「剣聖ですぐ出てくるあたり、やっぱり有名なんだね一心様」

「有名も有名よ！ 特に一心様はむかーし昔にいた、この長野原の花火がだーい好きな

お得意様だったらしいんやで！」

「へー！ 一心様も花火を見てたんだな！」

「そうやそうや！ ほかにもな！」

話好きの宵宮は、嬉々として語り始める。

「一心様は今から500年くらい前までずうつと長野原の花火を見ていてくれたらしいんや。どんな出来でも、どんな時でも、花火を見ていてくれたらしいんや」

「一心様って良い人だな！ おいらも宵宮の花火が好きだぞ！」

「褒めても飴玉しか出えへんって！ そんな一心様は、花火の時にはいつも將軍様を連れていたそうなんよ。あ、今でも將軍様は花火を見てくれてるで。よくお忍びで様子を見に来るんよ」

「え、宵宮って影と会ったことあるの？」

「影……ああ、將軍様のこと？ 將軍様をそう呼ぶって、やつは螢は大物やなあ！」

「それほどでもないけど……」

宵宮の誉め言葉に、少しだけ螢は照れくさそうにする。

少し気になることがあったが、今はいいだろう。

「それで、なんで螢は一心様のことを聞いてきたん？」

「えっと、実は……」

一心のことをなげ聞いてきたのかについて問い返されると、螢は理由を話し始めた。「……ということがあったんだよ」

「え!? あの戦場に一心様がいたあ!? んなアホ……って言えないやん! 將軍様も見て、ほんもんだって確信してるつちゅーことは、ホンマに一心様がよみがえったつちゅーことやないかい! ど、どどどないしよう!? それがホンマのことやと、特製の花火作らなあかんことになるー! 次の花火大会は大騒ぎやでー!」

「お、おいもうちよつとあるんだぞ宵宮——!」  
「行っちゃったね……」

お得意様の剣聖がよみがえったと思った宵宮は、パイモンが止める間もなく家の中に消えていった。

おそらく特製の花火を作るためだろう。相変わらずの情熱家だ。

「どうする旅人? ああなつた宵宮は止まらないはずだぞ?」

「うーん……他に知ってる人は……」

話を聞こうとしていた相手が仕事に戻ってしまったことで手持ち無沙汰になった二人。

そこへ、とある人物が通りすがった。

「あら? 旅人さんにパイモンさんじゃないですか。こんにちは。元気そうでうれしい

です」

「お、綾華じゃないか！ 久しぶりー！」

「久しぶりだね綾華。そっちこそ元気そうでうれしいよ」

現れたのは稲妻の神事と文芸娯楽を管理する社奉行——「神里家」の令嬢——「神里綾華」である。

そこで二人は、彼女に質問したのだ。

「なあ、綾華って一心様のこと知ってるか？」

「一心……剣聖様のことですね。宵宮からもよく聞かされていますが、神里家にもその名は残っています。……お二人がそう聞いてくるといふことは、あの時のことですか？」

「うん。影がそう言ってた」

「將軍様がですか……本当なんです、剣聖様がこの世に蘇っているといふことは……」  
重苦しい口調で、事実をかみ砕いていく綾華。

確かに、死人がよみがえるのはおかしいことだ。

だが、この世界は死人がよみがえることはなくとも、常人以上の力を持つ者たちはい

る。  
何かが起こっても不思議ではない。

それはさておき、一心という男についてだ。

「一心様は劍聖と呼ばれているほどの技の冴えがあります。その劍術は神里家にも一部継承されており、私もそれを目指して日々精進していますが……あまり成長できているとは思えません……」

「綾華でも無理な技……それってどんな技なんだ？」

「……『秘伝・一心』……一心様が自身の名を与えた神業です」

「おお……」

「んー……いまいちわからない……」

神業と綾華が称したほどの技。

それは一体なんなのか……綾華の口から語られた。

「それは神速の居合。あまりの速さに、斬撃が遅れて飛んでくるとか」

「斬撃が……遅れて……」

「私も劍の心得はあります。トーマや家臣の者達からはいずれ劍聖にもなりうると言われていました。でも、それほどの力を持った劍聖と同等に扱われるというのは、私には荷が重いのです」

少し照れたようにはにかむ綾華。

確かに、斬撃が遅れて飛んでくるといふ劍術を使えるのが劍聖であつて、それに遠く

及ばない自分が持ち上げられるのは少し恥ずかしいようだ。

「でも、いずれはたどり着いてみせます。あの、天上の絶技に」

「おお……頑張れ綾華！」

「はい。ところで、少しお茶にしませんか？」

「いいね。ちようどお腹が減っていたんだ」

「それでは『おはぎ』を食べに行きましょう。おはぎはおいしくてついつい食べ過ぎちゃうんですよ。今日くらいはこのような贅沢をしてもいいですよね？」

「えへへ、オイラはいいと思うぞ！」

そうして3人は並んで木漏茶屋へと向かっていった。

~~~~~

「あら？ 蛭にパイモンじゃないですか。元気そうで私も嬉しいです」

「『真』！ 奇遇だな！」

「久しぶり『真』」



たどり着いた茶屋には先客がいた。

先日ここで出会った影と瓜二つな顔をした女性。

しかし、その雰囲気は固い影とは違って明るなものだった。

彼女の名は「雷電眞」。

先代稲妻幕府の將軍であり、現在の將軍……雷電影の実の姉だ。

なぜそんな大物がこんな茶屋にいるのか……その疑問は綾華の声が代弁してくれた。

「せ、先代様!? こ、このようなところにいらつしやるとは……ど、どのようなお心で

……?」

「ああ、すみません。驚かせてしまいましたね神里の子。今の私はお忍びで来ています。

できれば内緒にしてくださいと助かります」

「は、はい……」

眞ははるか昔に將軍の座を降りているため、国を統治する権限「は」持っていない。

しかし、国の運営に関しての助言や方針を決定する権利はあるため、妹の影に負けず

とも劣らない権力を持っている。

稲妻の軍事を担当する「武」の雷電影。

稲妻の政治を担当する「智」の雷電眞。

この二人によって、稲妻は運営されているといっても過言ではないのだ。

だからこそ、今の状況を端的に表すなら「引退したとはいえ元国のトップが行きつけの店にいるという状況」である。目をむいて驚くのは当然だ。

それはさておき、蛭たちにとっては渡りに船であった。

「なあなあ眞。オイラたち、劍聖について調べてるんだけど、なんか知ってるか？」

「……彼のことですか？ ええ、よく知っていますよ。昔はいろんなことをしてくれたおかげで大変でしたからね」

「う、うわあ……すっごい怒ってる……。眞がそんなに怒るなんて、一心様はなにをしたの？」

「そうですね……それはもういろんなことをしましたよ。彼が若いころは木を斬りすぎて山が一つ不毛の土地になったり、突然に散財し過ぎたせいで予算の組みなおしが必要になったり、名家の当主だというのに仕事を家臣に投げて一人山籠もりに行ったり。他にもですね……」

「わ、わかったから！ そんな目で淡々と喋らないでくれ！」

語るうちに段々と光の無い目になってきた眞を焦ったパイモンが止めた。

なんだかこのまま話させていたら止まらないと思っただからだ。

「先代様にもこのような悩みが……」と、綾華が少し親近感を覚えたような声色で呟いていた。

「——ですが、彼はいろいろなものを残してくれました」

そんな緩んでいた空気をその言葉が引き締めた。

「剣術、軍事、政治だけに限らず、新たな食事、新たな文化、新たな道具など、今の稲妻を形成したといつても過言ではない多くのものを残してくれました」

「へー！ やつぱり一心様って凄いな！ 食事も作ったなんて……うへへ……」

「ふふつ、パイモンは食事に目がないようですね。このおはぎも彼が考えたお菓子なんですよ？」

「剣聖様がおはぎを作られたのですか!？」

眞が指し示した皿に乗っていた菓子——「おはぎ」が一心によって作られたということにこの日一番驚いているであろう綾華の様子を微笑ましく見ながら話を続ける眞。

「元は彼が娯楽用にと作った菓子でしたが、影がとても気に入りそれで以降は稲妻全土にも広まったんです。これを作った時に彼はこう言いました」

『ただ飯を食うだけならよほど貧しいものでもない限り誰でもできる。じゃが、ただ無感情に生きるためだけに食うならつまらないじゃろう？ 儂は変化し続ける今が好きじゃ。酸いも甘いも知ってこそその人生。じゃが、好きなように生き、好きなように死んでも良からう。それが人間というものじゃよ』

「……彼のこの言葉があったからこそ、私たち姉妹は大きく変わったのかもしれませんが」

「おお……」

「好きなように生き……好きなように死ぬ……それが劍聖様の心……」

——「好きなように生き、好きなように死ぬ」。

眞から告げられた劍聖の言葉は、今を生きる者達にも響いたようだ。

思わず感嘆している3人の様子を見て少し困ったような表情をする眞。

「それはさておき、皆さんはここに休みに来たのでしょうか？　なら、一杯お話をしながら

おはぎを食べましょう」

「おう！　オイラお腹ペコペコなんだ！」

「私も。綾華は大丈夫？　緊張してない？」

「……ハッ！　す、すみません旅人さん。少し物思いに……私もいただいていいのでしようか？」

「ふふつ、大丈夫ですよ。食事は楽しむものですから」

「！　はい！」

皆が席について各々が注文した菓子を食べてつ、様々な話をして時間は過ぎていく。

~~~~~

「そういえば、新たな料理を作ったって言ってたけど、他にどんな料理を作ってたんだ？」

「そうですね……いろいろありますが、印象深いのは……」

『雷鳴仙の塩焼き』……でしょうか？』

~~~~~

ヤシオリ島、無想刃狭間にて。

「うがががががが!!! シ、シビレレレレレレ!!!」

## 葦名一心伝説任務について語るスレ

1 : 名無しの旅人

また話題が出てきたので立てた

2 : 名無しの旅人

ナイス立て

3 : 名無しの旅人

立て乙

4 : 名無しの旅人

いやあ、話題出るの早すぎね？

5 : 名無しの旅人

まさかの宵越しの銭は持たない主義を地で行くとは……

6：名無しの旅人

あんのバーサーカー爺ちゃんが眞さん達に頭下げてたつてマ？

7：名無しの旅人

あり得そうなのが怖いんだよなあ……

8：名無しの旅人

あの過去ムービーでうかがえた性格からして、結構俗な人だけどいい人ではあるんだ

よ

だけどその度合いがいろいろと過ぎていると思う

9：名無しの旅人

それな

人  
ご近所さんとしては欲しいところだけど、親戚とか上司関係にはちよつと遠慮したい

10：名無しの旅人

なまじつかいいい仕事するから手に負えない

戦も強くて政治もできるとか、この爺ちゃん完璧では？

11：名無しの旅人

その反動はヤバいがなあ！（お山がマルハーゲ）

12：名無しの旅人

また髪の話してる……

13：名無しの旅人

はははハゲちやうわ!?

14：名無しの旅人

誰もお前のことは言っていない定期

15：名無しの旅人



それより、今回判明した情報を整理しようぜ

16：名無しの旅人

OK！（ズドン！）

17：名無しの旅人

つつても、珍しく戦闘がほほほ無いからな今回の伝説任務  
ストーリーメインとか珍しくね？

18：名無しの旅人

秘境どころか敵すら出てこないからな

19：名無しの旅人

その代わり影ちゃん達の神様組とかのことをめっちゃ知れてウレシイウレシイ

20：名無しの旅人

木漏茶屋で買えるおはぎのレシピって一心様が作ったんだな

そこでそれを影ちゃんが好んで食べてると

21：名無しの旅人

うん、美味しい！

【何個かなくなつたおはぎのパックの画像】

22：名無しの旅人

おまつ、飯テロやめい！

23：名無しの旅人

通販でポチるか……

24：名無しの旅人

実際おはぎ美味しいぞ

田舎のばあちゃんがよくくれて、その時食べたのがめっちゃ美味かった

25：名無しの旅人

うへ、おはぎの売れ行き伸びてるな……

老舗のおはぎ買いに行ったら売り切れてるんだが

26：名無しの旅人

まさかの原神効果がここで出るとは……

27：名無しの旅人

これ1周年目ですナリオか？

飛ばし過ぎじゃないこれ？

28：名無しの旅人

まあ、売上げは滅茶苦茶なほど良いし、俺達は期待して待とうじゃないか

29：名無しの旅人

それもそうやな

30：名無しの旅人

ほんじゃ次これでいいか

【万葉が『怨嗟』について言及している画像】

31：名無しの旅人

怨嗟……マジで業障みてえだな……

32：名無しの旅人

あつちと違って魔物を殺したから負のエネルギーみたいなのがその人に降り積もるんじゃなくて、土地そのものにヤバいエネルギーが蔓延してるっていう

33：名無しの旅人

昔の伝染病と違ってオカルト的な面が強そうだなこれ  
土地を呪うレベルって魔神でもなきや無理そうだが……

34：名無しの旅人

そこも謎だよな

35 : 名無しの旅人

つてか、俺思ったんだけどさ

36 : 名無しの旅人

>>>35 ん? どうした?

37 : 名無しの旅人

いや皆気にしてなかったけど、一心様って「大昔」に生きてた「人間」だよな?

じゃあなんで、歴史が長いとはいえ結局は人が起こした宵宮のところの花火屋のご先祖様が一心様本人を知ってるんだ?

つて思ってたんだけど……

38 : 名無しの旅人

!?

39 : 名無しの旅人

!?

40 : 名無しの旅人

!?

41 : 名無しの旅人

!?

42 : 名無しの旅人

そ、そーいやそーいだった!?

43 : 名無しの旅人

一心様あれ人間か？ っと思ってたけどそーいやそーいだったよ！  
あの人なんで生きてるんだ!?

44 : 名無しの旅人

仙人……じゃないのは影ちゃんから言われてる

妖怪……でもないよな。影ちゃんが言ってた

じゃあなんだあれ……なんの仕組みで……  
って、あ！

45：名無しの旅人

どうした>>44！

46：名無しの旅人

そうだ！ ムービーで言ってたよ影ちゃんと一心様！

「怨嗟のおかげで他の者よりも狡（ズル）ができた」って！

47：名無しの旅人

!?

た、確かに！

48：名無しの旅人

ってことは、怨嗟は……!?

49：名無しの旅人

……一心様は怨嗟が降り積もりすぎて人をやめてる……!?

50：名無しの旅人

あ、ありえる……!

51：名無しの旅人

怨嗟……マジでなんなんだ……

52：名無しの旅人

一心様がよみがえったのも謎だ……影ちゃんが決闘を経ても生きてるってことは、一心様は影ちゃんに斬られたはず……

53：名無しの旅人

一番考えたくないのは怨嗟で蘇らせられたってことだよな……

54：名無しの旅人



そうなったら……

55：名無しの旅人

週ボスだな

56：名無しの旅人

ああ……つてちよww

57：名無しの旅人

おうこらww

58：名無しの旅人

>>55 シリアスをぶち壊すんじゃないww

59：名無しの旅人

いやまあ、鍾離先生の前例（若陀龍王）があつたからありえなくはないんだけどさあ

ww

60 : 名無しの旅人

……おいおまいら冷静に考えてみる

あのトンチキ性能の一心様が週ボスだぞ

財布が週ボスになった時を思い出せ

61 : 名無しの旅人

財布……週ボス……タルタル……あつ

62 : 名無しの旅人

あつ

63 : 名無しの旅人

あつ

64 : 名無しの旅人

あつ

65：名無しの旅人

あつ

66：名無しの旅人

あー……フィールドほぼ全域に即死攻撃……

67：名無しの旅人

高速移動……

68：名無しの旅人

通常攻撃感覚で広範囲攻撃……

69：名無しの旅人

うつ、頭が

70：名無しの旅人

それプラス複数フェーズ付きの財布に若陀の例もある

71：名無しの旅人

せめてトワリンみたいに紙装甲であってくれ……

72：名無しの旅人

わんわんおみたくに元素無効はないはず……

73：名無しの旅人

淑女みたいなスリッパダメージもないと思いたい……

74：名無しの旅人

皆トラウマ刺激されてて草

俺もや（影ちゃん育成で毎週淑女マラソン中）

75：名無しの旅人

俺も（鍾離先生育成中）

76：名無しの旅人

……ま、まあ相手はただの人間だ！

タルタルもトワリンもナーフされてるから大丈夫やろ！

77：名無しの旅人

本当にそうかな……

78：名無しの旅人

最近の週ボスは特殊システム付きだぞ？ ○

79：名無しの旅人

うわああああああああああああああああああああ  
!!??

80：名無しの旅人

マジかよおおおおおおおおおおおおお  
!!??

81 : 名無しの旅人

＼ (^o^ ) ／

82 : 名無しの旅人

うーん、別ゲーになる予感マシマシだなあ！